

〔第三集曲目解説に寄せて〕

ロマン華やかな時代に開花したマンドリン音楽の最大な魅力は、やはりロマンに帰する。と云う私の信条は変わっていません。

譬（たと）え世の趨勢（すうせい）に副わないものであったとしても、迎合して変身することは自滅の道を早めるだけであって、

楽器が存在する限り、それは意味のないことと思っています。

私は過去にそうしたものゝ失われるのを惜しんで、50数冊を私的に刊行してみましたが、反響らしいものはありませんでした。

スコアだけが合ったのでは、どうも役に立たないようです。

今回JMU本部の市毛氏のご好意で又々刊行が始まったものゝ同じ轍を履むのではないかと憂えています。

日本のマンドリン音楽の在り方が、総体に演奏会を開くためのものゝのようで、勢い大編成の大掛かりなものばかりに眼が行って、

無数に存在する佳曲が埋もれた儘（まま）に忘れられています。

それどころか楽器店にはマンドリンも無く、書店には何一つ関係書籍は見あたらずという現状では、どうにも発展のしようがないのですが、

又それをさして痛傷とも感じないようなところに致命的なものがあります。

マンドリン曲の解説めいたもの、作者の経歴なども数十年前に武井、沢口などの先輩によって書かれたものを根幹に、

多少の補足をしたものがある程度で、此処にも追求の跡が見出せません。

この楽器の愛好者は、唯安易に弾いて楽しめばよいのであって、そうしたことへの関心？（が極めて希薄であること）を思うと

、虚しさだけが先走って筆が鈍るのです。

嘗（か）っては傍（かたわら）も愕くほど情熱を傾けた人も、年と共に本職本業の忙しさに紛れ、いつしか疎遠となるケースが多く、

少し落ち着いた頃は社会的にも家庭的にも重要な地位になっていて、嘗ってのように身軽に動けなくな

り、
ひいては今更と諦めたり、積極性を失って了う人が多いようです。
なれば一体若い時の情熱は何だったのかと私は云いたくなります。

〔マンドリン合奏曲集（JMU版）第三集 曲目解説に寄せてより〕